

青蘿発句注解 五

富田 志津子

はじめに

本稿は「青蘿発句注解一〜四」^{※1}に続くものである。栗の本青蘿が生涯に詠んだ発句を、年代のわかるものは古い順にとりあげ、注解している。今回は天明六年から同八年までの三年間に詠んだ発句、またはその間の俳書に載るものを採り上げた。

一

もと姫路藩士であった青蘿だが、藩を追われ加古川で俳諧宗匠となった。しかし、天明四年には姫路藩の久離が解かれていた（『摘古採要』『青蘿伝』）。天明六年の青蘿は四十七才、もう罪人ではなく立派な宗匠である。門人は、播磨や但馬、淡路などに広がり、それも富裕層が中心であった。青蘿は、そうした門人をしばしば訪問する。邸宅に滞在し、句会を催し、連句を巻く。門人が没すれば駆けつけて追善句会を開く。そうした青蘿の活動が、この頃残された発句からわかる。

また活動初期の青蘿は、関更、樗良と交流があった。そしてやがて蝶夢の傘下に入る。^{※2}天明六年頃も同様に蝶夢を紹介して重厚らともつながりをもった。ところが、天明七年に、青蘿は京へ上って、暁台、几董、関更ら当時の著名俳人六人を相手に両吟歌仙を巻いた。それを出版したのが『都六歌仙』である。このことで青蘿の俳諧のあり方が変わる。蝶夢との関わりが少なくなり、その代わりにこうした都住の俳人たちとの交流がはじまる。几董と急速に親しくなったのもこの頃である。^{※3}『統一夜四歌仙』『きくの宿』『松のそなた』への入集から、青蘿と几董の親しい間柄が推

測される。

以下に、その頃の青蘿の発句を注解する。(引用文や句の文字のうち、旧字体は現行に直し、濁点を補った。また、適宜、振り仮名も付している)

① 夏病なつやみやこゝろをすゝむ鉢の菊 涼 播くりの本 青蘿

夏(夏病) 出典『たねだはら』(天明六年、良交ら編)。『青蘿発句集』(寛政九年、玉屑編)にも入る。

【訳】夏の暑さの中、病んでいる私だが、鉢植えの菊の花に心が癒えるようだ。心の夕涼みといえようか。

【注】「夏病」は「夏瘦」と同じ。夏の暑さで心身共に参ってしまったのであろう。そんな時には、花をみるのがよい。「こゝろをすゝむ」という表現が新しい。「涼」も夏の季語である。

『たねだはら』は蘭更系の俳書で、類題句集の形式になっている。

② 名月なつきや更ふくるにつけて泣上戸なきじょうこ 青蘿

秋(名月) 出典『遅楊和舞頭歌』(天明六年、支白編)。『都六歌仙』(天明七年、青蘿編)、『青蘿発句集』にも入る。

【訳】今日は仲秋の名月、月見酒を楽しんでいる。夜が更けるにつれ、月影は凄くなり、酒はまわる。やがて泣き言が出て次第に泣き上戸になってしまう。

【注】『遅楊和舞頭歌』(ちやわんづか)は浮流追善集、編者の支白は丹後の人である。蝶夢系俳書。

③ 秋立あきたつや起出おきるかたに嵐やま 播磨 青蘿

秋(秋立つ) 出典『句双紙』(天明六年、重厚編)

【訳】今日から秋、まず風に秋を感じるはずだが、朝起きるとまず嵐山が目に入った。そこに吹くのはすでに嵐だろうか。

【注】京、嵐山で詠んだ句。古来、「秋来ぬと目にはさやかに見えねども 風の音にぞおどろかれぬる」(『古今和歌

集』藤原敏行）より、秋は風からはじまる、とされる。嵐山からはどんな風が吹くのか、と地名を楽しんでいる。『句双紙』は、重厚が諸家の発句に自句を配して句合にしたもの。

④ 桜寒し雨に明^{あけ}ゆくあらし山
春（桜） 出典『句双紙』

【訳】今日の嵐山は、嵐ならぬ雨。夜明けの頃、桜のあたりは寒々と夜が明ける。
【注】③に続いて、嵐山における句。③は風、④は雨を詠んでいる。

⑤ くさの戸や巢もくひ安き友雀 播州 青蘿
雑（「友雀」では季語にならない） 出典『宇良不二』（天明六年、重厚編）、『桃くらひ』（天明八年、青牛編）にも入る。

【訳】私の草庵に雀がやって来て巣を作る。私と雀は友雀のようなものだが、草の庵は雀が喰うに適しているようだ。巢と庵を喰っては困るのだが。

【注】『宇良不二』は重厚が甲斐国に遊んだ折の集。全国諸家の四季発句も収める。

観月楼良夜

⑥ 月今宵古人まぶたに浮むや夢 青蘿
秋（月） 出典『観月楼句集』（寛政元年、乙坡編）

【訳】今宵は名月が美しい。こんな夜は、古人があれこれとまぶたに浮かんでくる。それは夢なのだろうか、現なのだろうか。

【注】天明六年の吟。青蘿はこの年、五月に但馬国広谷の門人、桃如の観月楼を訪れ、冬まで滞在した。これは、同年、八月十五夜に催した、青蘿・桃如・字樵・乙坡・馬北・五畔・至峰の七吟歌仙の発句。桃如は、天明八年七月に没し、その一周忌追善集が『観月楼句集』である。

⑦ 冬(雪)

うときを恨むことなかれ、若きをたのみ事なかれ、友はたゞ逢ふ時をもて、たのしとせんや
わすれめや忘れぬ顔に雪のてり 青蘿

出典『観月楼句集』

【訳】私はこれで去って行くが、友を忘れることがあろうか、いや忘れはしない。今、友の顔が、雪で照り輝いている。

【注】前書は、「縁が薄いと恨むな、若いからいつか会えると思うな、友は会っているその時がすべてなのだ、その時を楽しもうではないか。」というもの。句は、『観月楼句集』中巻所収、青蘿・桃如・直生の三吟歌仙の発句。天明六年冬に観月楼を去るに際して、越中の直生、桃如と卷いた歌仙である。

⑧ 春(七種)

七種ななくさやなくてぞ数のなつかしき 青蘿

出典『天明丁未初懷紙』(天明七年、几董編)

【訳】今日は正月七日人日、春の七草を食す。ところが、七種類そろわなかった。そうになると、ことのほか「七」という数にこだわりをもってしまう。

【注】「な」の音を重ねる。『日本歳時記』(貞享五)に「正月七日・七種の菜粥を製し食ふ」とある。春の七草は、セリ、ナズナ、ゴギヨウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロ。

⑨ 冬(初雪)

初雪や真葛まぐすの枯葉降ふりつたふ 青蘿

出典『都六歌仙』(天明七年、青蘿編)

【訳】初雪が降ってきた。それは、冬枯れの地の葛の枯葉の上にかかって、下へ伝い落ちていく。

【注】天明七年夏、青蘿は都へのぼった。そして、几董、月溪、五来、臥央、暁台、闌更と両吟歌仙を巻き、『都六歌仙』として刊行する。この発句は、その第六、闌更との歌仙の発句である。

花の散には春をうらみ、月の曇には、我身を思ふ

⑩ うづみ火やいく夜かあぶる鼻柱 青蘿

冬（埋火） 出典『続一夜四歌仙』（天明七年、几董編）

【訳】ここ数日、夜になると、埋火に顔を寄せて、鼻柱をあぶっています。都の皆さんと俳諧をとみにして、私の負けん気もますます起こってくるものです。

【注】天明七年、都にのぼった青蘿は、『都六歌仙』の歌仙を卷いたあと、月溪居に、暁台、月溪、几董と会して、四吟四歌仙を巻く。この句は、その歌仙の発句。前書で、花鳥風月に心を碎く我が身のことを延べ、発句で今日の闘志を言う。鼻柱は負けん気。

⑪ 稲の香の満るを今宵月の雲
（稲の香・月） 出典『青蘿発句集』

【訳】実りの秋となり、田には稲の香りが満ちている。名月の今宵、雲が出ているが、これも天の恵みかもしれない。

【注】長い前書があり、天明五、六年頃、天候不順で飢饉だったが、七年になってようやく稲が実り、青蘿は門人らと荒井川に船を浮かべて月見をした、という。天明七年八月十五夜の吟とわかる。月を隠す雲が出ているが、それさえ恵みの雨の名残と思われる。荒井川は播州高砂、荒井村付近を流れる川。この年、夏に都へ出た青蘿だが、秋には加古川に戻っている。

⑫ 蘭の香も閑をやぶるに似たりけり ハリマ 青蘿

秋（蘭） 出典『きくの宿』（天明七年、几董編）。『青蘿発句集』にも入る。『俳匠年鑑』（天明七年、嵐月編）に「菊の香も閑を破るに似たりけり」の形で入る。

【訳】かぐわしい蘭の香りがただよう。どこかなまめかしささえ感じられ、閑寂の境地を破ってしまうようだ。

【注】芭蕉に「蘭の香や蝶の翅に薫物す」（『野ざらし紀行』）があり、それと同じく、優美でかぐわしい蘭の香りを

詠む。

『きくの宿』は、几董の編。夜半亭継承後に刊行したもの。

- ⑬ 冬（埋火） うづみ火や梅の苔もあたゝまれ
出典『きくの宿』。『青蘿発句集』にも入る。 青蘿

【訳】外は寒いが、家の中の埋火のあるあたりは暖かい。まだ固い梅の苔みも、この埋火で暖まり、はやく咲いてほしいものだ。

【注】埋火は、灰の中に埋めた炭火。囲炉裏や火鉢の炭である。屋内のことなので、梅は鉢植えか、切り花である。

- ⑭ 冬 狐にも喰るゝふゆの蝨哉
歌仙行 青蘿
出典『あまが家』（天明七年、嵐外編）

【訳】蝨は秋には活発でよく跳ぶが、冬はまるで元気がない。狐は逆に、冬になると元気で、そんな狐にあつという間に食べられてしまう蝨だ。

【注】狐はネズミや鳥類のほか、昆虫も食べる。冬が交尾期で活発になる。冬の季語になったのは、近代になってかららしい。蝨は、夏に孵化し、秋に成虫になる。もっぱら稲を食う。冬になると弱って死んでしまう。句は、元気な狐と弱った蝨。

『あまが家』は天明七年九月に没した鰐交追善集。友人の嵐外が刊行した。この句は、鰐交との両吟歌仙の発句なので、天明七年以前の作。

- ⑮ 秋（菊・月） きくよ月よ我ひとりなく友にせん
出典『あまが家』 『青蘿発句集』に「鰐交を悼む」と前書して出る。 青蘿

【訳】九月十日、鰐交が亡くなった。折しも菊の節句の頃、また、後の月も近い。美しい菊と月を友に、私は一人

で泣こう。

【注】この句は、鰾交の追善両吟歌仙の発句、脇は嵐外。追悼の長い前書文がある。

如是相

①⑥ うき寝すなりひとつ湊の雁と船

青蘿

冬（浮き寝の雁） 出典『あまが家』

【訳】那波の湊に停泊する船と、水に浮いたまま寝ている雁、それは同じ姿で、この世を流浪するものである。

【注】前書「那波の江中の四時をもて、十如是のこゝろにならひて発句をものし、おのゝ手向のひとくさとする」とある。那波の湊の四季の風景を詠んで鰾交への供養とした。十如とは、法華経で、一切の事物の実相には十種の如是（真如实相）があるとするもの。如是相はその一つで、相は相状つまり形。那波の湊の船と雁は、同じような姿で浮き寝している、という。雁はそのままでは秋の季語だが、「浮き寝」で冬になる。「浮き寝」は、水鳥が水に浮いたまま寝ること、鴨や千鳥をさすことが多いが、雁も湖沼や海に浮かんでいる。『御傘』（慶安四）に「浮寝の鳥・冬なり」とある。

①⑦ 花の中折く曲る小坂哉

青蘿

春（花） 出典『あまが家』。『青蘿発句集』にも入る。

【訳】満開の桜の道、所々曲がりながら道は坂を登っている。

【注】「四季発句」の句。

①⑧ 待罪も月あかりきほとゝぎす

（青蘿）

夏（時鳥） 出典『あまが家』

【訳】時鳥の一声を聞くまで待つ、などと益にならぬことをするのは罪か。そうだとすると、その科に月が明るく美しい。

【中】夜が更けるまで時鳥の一声を待つのは古来の風流。それを罪とするのは自嘲か。「四季発句」の句。

秋 ⑱ 名月や今宵ゆきふる山あらん
(名月) 出典『あまが家』、(青蘿)

【訳】今宵は仲秋の名月、月明かりに照らされて、夜の風景が美しい。このとき、山は、あたかも雪が積もったように輝いて見える所もあるだろう。

【注】名月の光に照らされて、白く輝く風景を思いやっている。「四季発句」の句。

冬 ⑳ 初雪や利休が恋の中ぐり
(初雪) 出典『あまが家』、(青蘿)

【訳】初雪が降ってきた。静かなこの時期になると、利休は恋のために、茶室に向かう。中ぐりの門を通して。

【注】「中ぐり」は茶室の外露地と内露地の間にある門。物語的な句。「四季発句」の句。

春 ㉑ 山桜ちるや葉ごしの走り舟
(山桜) 出典『骨書』(天明七年、李雨編) 青蘿

【訳】山桜の花が散っている。その葉越しに、帆船が速く通り過ぎていくのが見えることだ。

【注】「葉ごし」は葉の隙間から透いて見えること。山桜は花と葉が同時に出る。「走り舟」は帆を上げて早く走る舟。これは『骨書』の「さくら」の部に入る句。

『骨書』は、安永元年に樗良が青蘿を訪ねて来、両者が卷いた歌仙を中心として、諸家の発句も収める。樗良七回忌の天明七年に李雨が刊行したもの。青蘿の作品は、樗良との両吟歌仙七、発句二が入る。安永元年に卷いた歌仙の発句は「注解 二」に既出。

寄鮑恋

夏 ②② かた思ひ齒にもあはざる鮑かな 青蘿
(鮑) 出典『骨書』

【訳】鮑は、片思いするとされている。食べてみるとこりこりと固く、自分の齒にはあわない。誰からも愛されることのない、あわれな鮑であることよ。

【注】「磯の鮑の片思い」という詞がある。鮑は一見、二枚貝の片側だけのように見えるので一方がもう一方を恋い慕うとされる。片方しかないので、片思いである。句意は、貝にも合わず、人の齒にも合わない、誰からも愛されない、というものか。「恋」の部に入る句。乾巻の巻末句。

冬 ②③ ふたよ三夜ねざめとはる、時雨かな 播磨加古川 青蘿
(時雨) 出典『しぐれ会』(天明七年)

【訳】このところよく時雨が降る。二晩も三晩も、寝覚めた時に時雨のかそけき音を耳にすることだ。

【注】「寝覚めの時雨」は、目覚めた時にきく時雨の音で、和歌に詠まれる。「秋深き寝覚めの時雨き、わびておき出で、みれば村雲の月」(『玉葉』院新宰相) など。

この年の時雨会には、青蘿はこの句を投句するのみだった。

春 ②④ 草庵に梅あり、梧堂あり、んめは春のこゝろを匂はし、梧堂は薪水に信をつくす
まめやかにこれも春たつはね釣瓶 青蘿
出典『蓬萊帖』(天明八年、梧堂編)

【訳】梧堂は、私の草庵にあって、実直に炊事をして私を助けてくれる。新春を迎えた今日、梅は香り、梧堂はいつものとおり水を汲む(以上、前書きの訳)。そのはね釣瓶にも、春が立っていることだ。

【注】『蓬萊帖』は栗の本歳旦帖。この句は巻頭句で、三つ物の発句。連衆は、青蘿、梧堂、其良。「まめやか」は、まじめ、役に立つ、懇切などの意味がある。「撥釣瓶」は、釣瓶を跳ね上げて水を汲む仕組みのもの。梧堂と撥釣

瓶の仕事ぶりを重ねて、「まめやか」として春を言祝ぐ。

『蓬萊帖』の刊記は「栗本書林播魚崎宣春館玄駒寿刀」である。玄駒は書肆隅屋喜右衛門で、「栗の本書林」を名乗る。

正月七日、庵中月次初会興行

俳諧連歌

中く古葉句へる著かな

青蘿

②⑤ 春

(著) 出典『蓬萊帖』

【訳】今日は人日、七草を食する日である。著を摘もうとすると、暮れから残っている古い葉が、かえって良い香りを醸している。

【注】歌仙の発句、脇は梧堂、第三は松溪、十五人で一順。「古葉」は、前年のまま残っている古い葉。新しい物だけでなく古い物にもよさはある、とする。

、(正月)十五日、明石青嵐亭月並興行

歌仙一順

春の夜や雨をふくめる須磨の月

青蘿

②⑥ 春

出典『蓬萊帖』

【訳】どこか物憂い春の夜、須磨といえは月の名所だが、鮮やかに見える秋の月とは異なり、今見えるのは朧月。ぼんやり見える月は、雨を含んでいるのかもしれない。明日は雨かも知れない。

【注】歌仙の発句、脇は蝸国、第三梧堂、七人七句までで「余略」

林田きく庵にて

②⑦ 菊の肥先こえみずかいそめむ屠蘇とそのから

青蘿

春（屠蘇） 出典『蓬萊帖』

【訳】 菊庵では菊を植えている。新春にここへ来ると、まず菊の肥やしの香りを嗅ぐことになる。屠蘇をいただくためには。

【注】 句の意味不詳。「かいそめ」は「嗅ぎ初め」か。「から」は「柄」で、原因理由をいうか。

春 ⑳ 山茶花の終し^{おわり}ほらし春のゆき 青蘿
出典『蓬萊帖』。『青蘿発句集』にも入る。

【訳】 冬の間は、にぎやかに咲いていた山茶花だが、早春、まだ名残雪がのこる庭に落ちている。ひっそりとしたその気配に、最後のしおらしさを感じることだ。

春 ㉑ 春の海あそびわすれて啼鳥 青蘿
出典『蓬萊帖』

【訳】 春の海は、ゆつたりと寄せては返す波に時を忘れる。鳥もその悠久の中で遊ぶことさえ忘れているようだ。だが、ふと我に返ったのか、かあと啼いた。

、（年尾）

冬 ㉒ せまりゆく日のあたゝかよ歳の梅 青蘿
出典『蓬萊帖』

【訳】 歳もせまって冬の梅が咲いている。そのあたりだけ、日の暖かさが感じられることだ。

【注】 「せまりゆく日」は、少なくなる日数と射す日光を掛けている。

冬 ㉓ ゆめの世の夢を見るまや歳忘 栗の本
出典『蓬萊帖』。『青蘿発句集』にも入る。

【訳】 この世は夢の世、一年の夢を見たと思ふや、たちまち今年も終わり、歳忘れとなった。
【注】 卷末発句。「歳忘れ」は、一般には、一年の苦勞を忘れるための宴会。

秋 ③② 既になき色を秋ふる尾花かな 青蘿

出典『遊子行』（天明八年、几董編）。『青蘿発句集』にも入る。

【訳】 秋の尾花は、「花」といつても白い。普通の花の色は、もともとないのだ。

【注】『遊子行』は、几董の、天明八年の畿内遊覧の紀行。摂津の須磨、住吉神社、箕面へ行っている。青蘿の句は「文音見聞雜記」の部に入る。

冬 ③③ 此ころ誰とかたらん初時雨 播州 青蘿

（時雨） 出典『松のそなた』（天明八年、紫暁編）

【訳】 初時雨が降ってきた。芭蕉が愛した時雨である。俳諧への思いや芭蕉への思いを、ともに語れる人がほしいものだ。

【注】『松のそなた』は、紫暁が播州に旅をして、青蘿一門と唱和した連句や発句を中心にしたもの。「冬之部」から始まり、この句が巻頭吟。紫暁への挨拶である。

於幽松庵興行

冬 ③④ 茶の花やありとも人の見ぬ程哉 青蘿

（茶の花） 出典『松のそなた』。『青蘿発句集』にも入る。

【訳】 茶の花が白く咲いている。しかし目立たぬその花は、咲いていても人が見ることはない。私はそのような、目立たぬつまらぬ者でございます。

【注】 紫暁との両吟歌仙の発句で、紫暁への挨拶。紫暁の脇は「二十七日の暁の霜」

③⑤ 烏啼たかきやばして高台橋の寒の月 青蘿
冬(寒) 出典『松のそなた』

【訳】 寒い冬の夕暮、高台橋に月がかかっている。そこで烏が一声啼いた。なんとも寂しい風景である。
【注】 「高台橋」は、浪速の堀江川にかかっていた橋。仁徳天皇の「高き屋にのぼりて見れば煙たつ 民のかまどはにぎはひにけり」(『新古今和歌集』)の歌にちなむ。天明七年夏に、青蘿は大坂の几董を訪ねており、その時、高台橋を見たか。そして冬の高台橋を思いやって詠んだのかも知れない。冬の烏は「寒鴉」「寒鳥」として漢詩に詠まれる。「冬之部」に入る句。

良夜

③⑥ 月と我中にこよひのけしき哉 青蘿
秋(月) 出典『松のそなた』。『青蘿発句集』にも入る。

【訳】 仲秋の名月があたり一面を照らす。その月と自分の間に、光に照らされたすべての世界の景色がある。
【注】 広大な風景を照らす月を詠んだ。「秋之部」に入る。

③⑦ 角上つのあげて牛人を見る夏埜なつかな 青蘿
夏(夏野) 出典『松のそなた』。『青蘿発句集』にも入る。

【訳】 夏草の茂る野で草を食む牛。暑い夏野に人は少なく、たまに通る人を珍しそうに牛が顔を上げて眺めている。
【注】 「夏之部」に入る。

③⑧ 我馬ゆくの行をしほりの雪見哉 播州加古川 青蘿
冬(雪見) 出典『雪之集』(天明八年、山之編)

【訳】 雪が美しく積もっている。馬に乗って馬の行くままに雪を見て歩こう。
【注】 馬にまかせてゆくのは、『奥の細道』の那須野の場面にある。また、『野ざらし紀行』の小夜の中山や「馬ば

くぼく」の発句など、芭蕉の作品をいろいろと思い出させる。

『雪之集』は樗良系の俳書。諸家の雪の発句、連句を集める。

おわりに

今回は天明六年から八年に詠まれた発句を注解した。『観月楼句集』『あまが家』は門人の桃如と鰐交の追善集である。それを見ると、青蘿は生前から、但馬広谷の桃如や、備前那波の鰐交を訪ねて、長く滞在している。また、訃報に接すると駆けつけて、追善句会を催しているのである。青蘿と門人の関係がよくわかる。天明七年良夜の、荒井川の船道遙は、門人達との風流な句会である。

また天明七年には都に上って、几董や暁台、闌更らと両吟歌仙を巻いている。都住の有力俳人たちとの両吟歌仙は、一朝一夕に成立するものではなく、これには門人布舟の助力があったと思われる。布舟は、蕪村とつながりがあり、几董とも親しい、栗の本門の有力俳人であった。^{※4}さらに「栗の本書林」を名乗る書肆玄駒を門人にもち、青蘿の一門は、宗匠も門人も盛んであったといえよう。そうして青蘿は、寛政二年に二条家俳諧宗匠の免許を受け、門人を率いて俳筵にのぞむのである。

この頃の青蘿の作風は、芭蕉の句の模倣が多かった初期の頃や、平凡なものが多い中期の頃より、技巧的である。「稲の香の満るを今宵月の雲」「月と我中にこよひのけしき哉」の良夜吟、「せまりゆく日のあた、かよ歳の梅」の歳尾の吟など、詞の使い方に巧みさを感じさせる。年齢と地位ゆえに、作品にも重みが出てきたのだろう。

【注】

- ※1 『姫路獨協大学外国語学部紀要』三〇・三三、『国際言語文化論集』一・二（二〇一七年二月、二〇一九年二月、二〇二〇年二月、二〇二一年二月）
- ※2 「青蘿と蝶夢」（関西大学『国文学』一〇二、二〇一八年三月）
- ※3 「青蘿と几董」（『俳文学報』五三、二〇一九年十月）
- ※4 「高砂の俳人、田中布舟」（『連歌俳諧研究』一〇三、二〇〇七年九月）

The Notes of Seira's Haikus V

Shizuko TOMITA

This is the following study of “The Notes of Seira's Haikus 1 to 4”.

This time I wrote the notes on the haikus composed by Seira from 1786 to 1788.

At that time, he was very active. He visited his pupils in Tajima and Bizen region.

He stayed there to hold haiku gatherings. And he rushed to his pupils when they had been gone. That is how he increased his pupils.

He visited Kyoto in Tenmei 7th to hold haiku gatherings with famous haiku poets. They were important activities for Seira, which were related to Nijoke Haikai in Kansei 2nd. His works at that time are skillful and not a few of them are eye-catching. In terms of his works and activities, I could say it was the most productive period in his life.